井上勲先生御退職にあたって

松本晃和

一九七七年に入学した私は七八年春から井上勲先生の演習の末席に加えていただいた。当時は、月曜四限め、一〇〇分の最終コマで六十人ほどが参加していた。以来、学部・修士と、ヤンチャで気ままな出来の悪い学生として井上先生のお手を煩わしてばかりであった。全く汗顔の至りで、その後も研究や論文とは遠い日々を送っている不肖の弟子ではあるが、先生からの御指摘をいくつかは現在に生かしている。

いつの演習の折であったか、はっきりとは覚えていないのだが、

「日本の近代の成立は、ペリー来航以外のことで確立することはありえません」

と、明確に提示された。

「天保期に萌芽がある」という説のことをいった時に「萌芽と成立は異なる」ということを鋭く示された。

福岡県で高校生に、主に受験用の概説的な日本史を教えている私は、この部分を説明する時、再認識し、自分が納得して教えている。福岡では、多くの高校が二・三年生の二年間継続で日本史を教えるため、ペリー来航は三年の夏休み前後で、その時に日本近代の成立の契機ということを語れる方向性が持てている。このことは井上先生にはごく自然のことだと提示されたのだろうが、私にとっては、根幹となるような御指摘であったように感じられる。この部分が、私なりの授業の根底になっている面がある。さらに必然となったことの前提条件が存在しても、その事象の実現は条件が存在するだけではないという当然のことをもう一度考えるヒントをいただいた。特に近代史で背景を重視しながら説明しているのだが、そこに必然を生じさせる存在があることを伝えるようめざしている。

もう一点、主に一九七八、七九年頃には、井上先生が盛んに言われていた「決断」という言葉が印象に残っている。一九八〇年頃は「現状維持」が何となくできそうで、現状の枠内での変革を求めていた雰囲気があった。そんな私のような学生には「決断」というのは「古い言葉」のイメージが強く、二十代前半にはその重みも十分にはわかっていなかった。

教員として教えていく中で「決断」が求められていく状況の中で

決断できなかった人々が如何に多かったかを再認識していった。つまり「決断」に対応できる人材が少なく、特に幕末というダイナミックな変革期での「決断」が求められながら、答えられないことが理解でき、逆に多くの担当者、大名も旗本もまた所謂「維新の志士」も含めて、如何に多く決断できなかったことを教えていただけたことが想起された。

それに加え、決断できなかったことが特別なことではなく、周囲の状況の中で「必然」のように存在した数多くの意見について、

「この意見は、まだマシだよ、自分の主張をしているから。ほとんどの藩は正論をいっても『然れ共』といっている。」

と解説された。このような何気ないように思える解説の中に本質を突くことを、井上先生に示していただいた。この点は大きな財産として私の中にある。

その一方、ゼミ合宿で二度「日本歌謡史」を、学部学生に講義していただいた。二度めは受講できなかったが、とても印象的で忘れられない。明治の演歌師、添田唖然坊らの演歌から始まった講義の中で、軍歌「戦友」が哀愁を帯びたメロディーではなく、少し軽妙なリズムを持っていたことを教えていただいた。考えてみれば「戦友」の後半部は凱旋して、村のリーダーとなった歌詞だから、その部分までも知られているメロディーならば合致しないことはわかる。しかし「当然わかる」べきことを考える柔軟性が求められていることを教えていただいたように思う。

また、その後の演習の時に、関連して、村の貧農の子弟が、兵士として活躍し金鳶勲章や位階を得て、村の有力者の村長や小学校校長たちより、式典・祭礼などで上座になり、村落共同体の秩序が、変化し崩壊していくことになるかの解説をされた。このことは明治末の地方改良運動の説明で使わせていただいている。

この時の最後は「月光仮面の歌」、それもオリジナルバージョンではなく、ロック調にアレンジされていたものだった。もっとも受講できなかった二回めのラストは、当然の如く「広島カープ応援歌」でニギニギしく終了したということだったが……。

卒業後、大学や東京へ行く機会は減り、たまに行った時も、休日や夏休み中であった私は、井上先生が卒論・修論の審査でお忙しいことがわかっていても、年賀状を送ること位しかできていない。

昨年末に年賀状を書く時、

「二〇一〇年。そういえば井上先生は一九四〇年生まれだった。二〇一〇年度で御退職になられるのか。」

と月日の立つ早さを思っていた。そんな私が井上先生の御退職にあたる言辞を述べるのはとても心もとないと思っているのだが、井上先生の「飾らない中に本質を鋭く求める」ような教えを受けた、不出来な学生の拙い謝辞としてお許しいただければ幸である。

井上先生、長い間本当に御苦労様でした。

そして、これからも優秀であった学生のことはもちろん、私のような不出来な学生のことも思い出していただき、今後とも御指導をお願いいたします。